

日本英学史学会 第60回全国大会 プログラム・発表概要



期日 2023年10月21日(土)~22日(日)

会場 兵庫県立大学(姫路環境人間キャンパス)

〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1丁目1-12 TEL: 079-292-1515

日本英学史学会本部事務局連絡先

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4-14 拓殖大学政経学部

矢ヶ崎 邦彦 研究室内

TEL&FAX: 03-3947-7111

Eメール: kyagasak@ner.takushoku-u.ac.jp

主催

【協力学術研究団体】

日本英学史学会

Historical Society of English Studies in Japan

大会日程

●10月21日(土)

12:30 開場・受付開始 《F棟3F F301教室》

13:00 開会の辞 司会：矢ヶ崎 邦彦（事務局長）
西口 忠（会長）

13:10～14:45 総会

総会司会：赤石 恵一（副会長）

1. 学会活動報告：西口 忠（会長）
2. 会計報告：矢ヶ崎 邦彦（会計委員長）
3. 豊田賞発表：飛田 良文（豊田賞選考委員長）
4. 支部活動報告：各支部長

15:00～16:00 講演

Dennis Charles Washburn 氏（ダートマス大学教授）

「美しき死の物語：源氏の崇高なる美」

Death is the Mother of Beauty: Sublime Aesthetics in *Genji*

16:00 事務連絡

矢ヶ崎 邦彦（事務局長）

16:15～17:00 旧制姫路高等学校史料見学 《ゆりの木会館（旧制姫路高等学校本館）》

17:30 懇親会《睦月》

姫路市南矢代町 10-10 TEL: 079-294-8500

（会場から南へ徒歩5～6分程度）

●10月22日(日)《F棟3F F301教室》

10:00～11:40 研究発表【午前の部】 司会：増井 由紀美

10:00～10:25 「札幌農学校1期生の学習履歴」
赤石 恵一（日本大学）

10:30～10:55 「戦前の日比谷高校の英語教育に関する研究：英語教師に焦点を当てて」
保坂 芳男（拓殖大学）

11:00～11:25 「重見周吉と宇和島ほか新発見」
菅 紀子（松山大学・岡山理科大学[非常勤]）

11:25～11:40 質疑応答

11:40～13:00 写真撮影・昼食

13:00～14:40 研究発表【午後の部】 司会：保坂 芳男

13:00～13:25 「聖公会伝道師・水科五郎関係史料と明治期のキリスト教伝道」
田辺 陽子（東海大学[非常勤]）（オンライン）

13:30～13:55 「朝河貫一(1873—1948)とG. B. サンソム(1883—1865)の関係」
増井 由紀美（敬愛大学）

14:00～14:25 「楠加重敏著『ネズミはまだ生きている：チェンバレンの伝記一』から学ぶ」
西口 忠（桃山学院史料室 特別研究員）

14:25～14:40 質疑応答

14:40 閉会の辞
飛田 良文（大会会長）

《大会役員》

全国大会会長：飛田 良文 大会実行委員長：石倉 和佳
大会実行委員：西口 忠, 増井 由紀美, 保坂 芳男, 矢ヶ崎 邦彦, 赤石 恵一

《参加費》

* 会員, 非会員ともに無料

《諸注意》

- * 大会出席の折には, 各自, 本プログラムを印刷のうえご用意ください。
- * 会場内は禁煙です。所定の場所以外での喫煙はご遠慮ください。
- * 会場における録音・録画はお断わりしています。ご了承ください。
- * 発表時にハンドアウトを用意される方は, 30 部程度印刷のうえご用意ください。
- * 会期中, 大学構内の売店は閉まっています。昼食は予めご用意いただくか, 周辺のコンビニエンスストア及び飲食店をご利用ください。



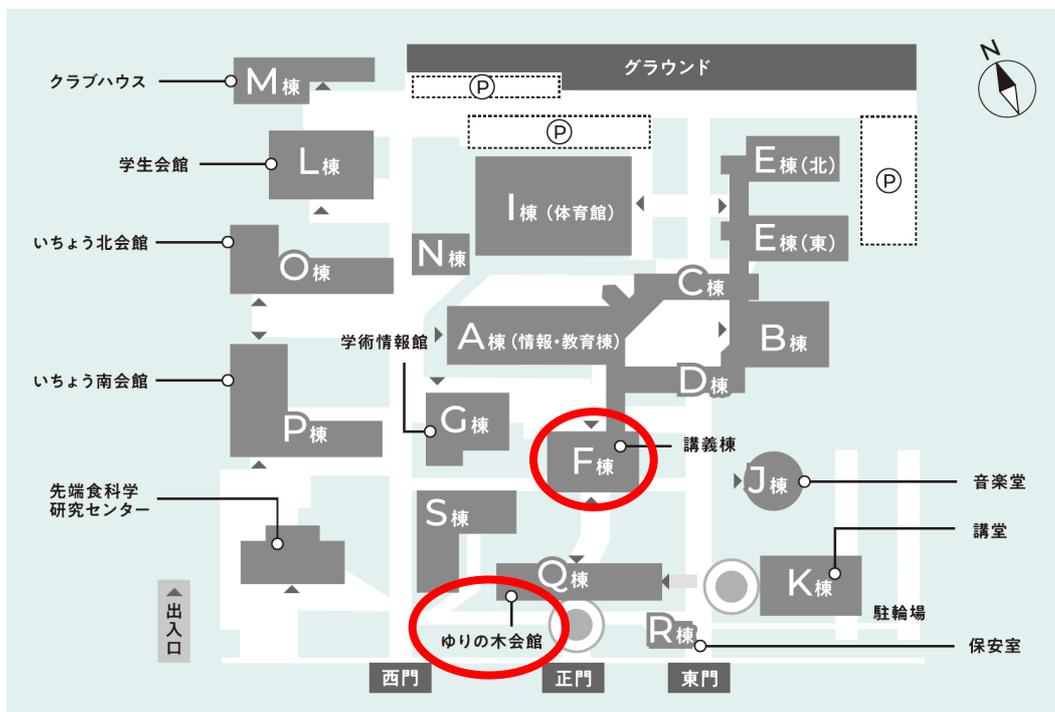
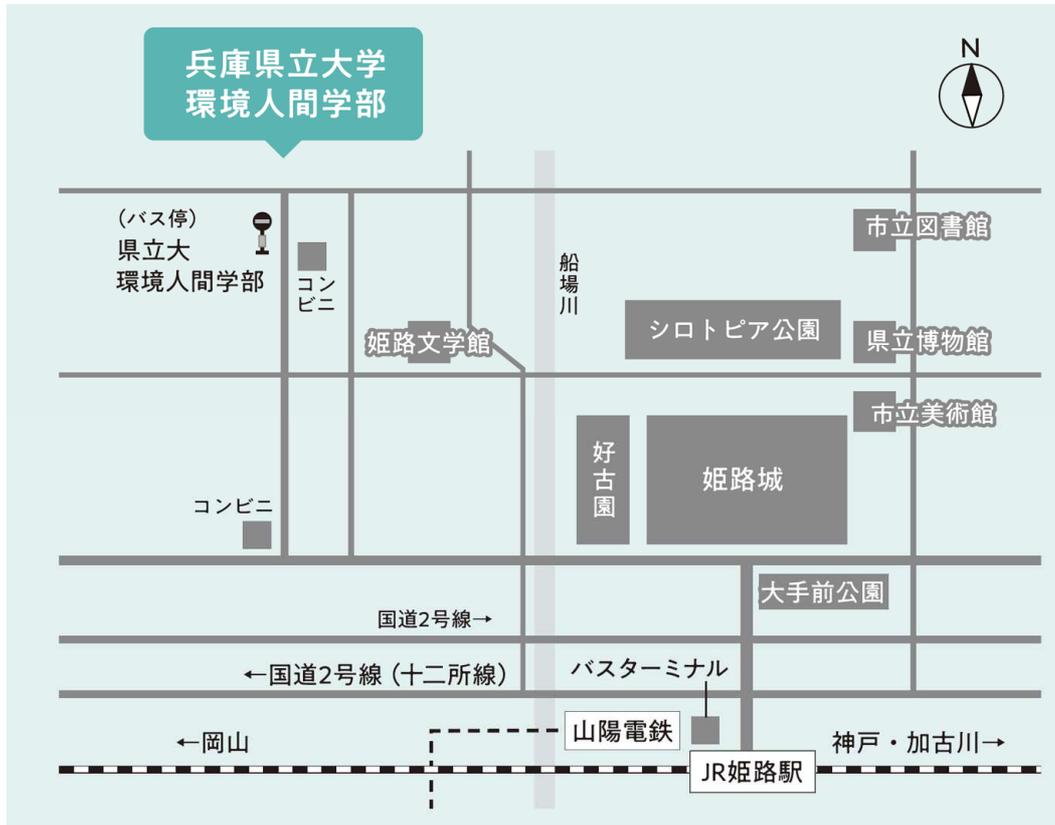
《交通》

- * JR・山陽電鉄 姫路駅北口より神姫バス:220 円/乗車時間: 約 10 分
9 番のりば 11, 12, 13 系統 (西高前行, 田寺北口行, 大寿台行等)
10 番のりば 8, 9 系統 (書写山ロープウェイ行, 大池台行, 北山口行等)
「県立大環境人間学部」下車
- * JR・山陽電鉄 姫路駅北口より徒歩 35 分

《宿泊案内》

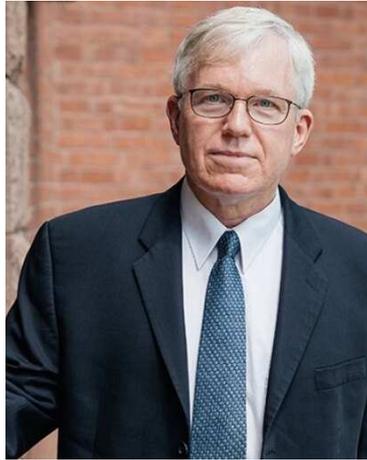
- * 各自で宿泊予約してください。
ダイワロイネットホテル姫路, リッチモンドホテル姫路, 東横イン姫路駅新幹線北口, コンフォートホテル姫路, ドーミーイン姫路など多数。

【会場案内図】



講演者 紹介

Dennis Charles Washburn 氏 (ダートマス大学教授)



(ダートマス大学 HP: <https://faculty-directory.dartmouth.edu/dennis-charles-washburn>)

経歴: イェール大学 (Ph.D.)

著書: *The Dilemma of the Modern in Japanese Fiction*, *Translating Mount Fuji: Modern Japanese Fiction and the Ethics of Identity*, *The Affect of Difference: Representations of Race in East Asian Empire*, 等

翻訳: 『源氏物語』 (紫式部), 『上海』 (横光利一), 『笑いオオカミ』 (津島佑子), 『雁の寺』 (水上勉), 等

受賞: 日米友好基金日本文学翻訳賞 (ドナルド・キーン賞)

発表概要 午前の部

札幌農学校 1 期生の学習履歴

赤石 恵一（日本大学）

札幌農学校は 1876(明治 9)年 8 月に開校した開拓使の高等教育機関である。当時マサチューセッツ農科大学の学長だった W. S. Clark が教頭として招聘されその教育にあたった。最初期の教師は漢学を除くほかみな Clark の教え子だったアメリカ人であり、その教授言語は英語であった。英語イマージョンということになる。1 期生として 24 名が入学、うち 13 名が卒業生した。卒業生のうち 2 名が東京開成学校、7 名が東京英語学校、4 名が札幌学校(旧開拓使仮学校)から入学しており、いずれも札幌農学校に先がけて外国人教師から英語イマージョン教育を受けていたことが分かっている。1 期生の英語熟達度の高さは先行研究によりこれまでも指摘されてきた。しかし、1 期生がそのような熟達度に達するまでどのような学習を行ってきたのか、その経歴や学習の実態を明らかにした研究はなく、何人かの学生に関してはその生年や出自も詳らかではなかった。本発表は、発表者が継続している札幌農学校 1～5 期卒業生 70 名を対象とした英語学習成功者研究の一断片である。1 期生 13 名に焦点を絞り、その出生から札幌農学校入学までの学習の軌跡を辿ったうえ、その共通点や特徴を分析する。後に北海道帝国大学初代総長となる佐藤昌介、東京中学院(関東学院大学の源流)初代学院長となる渡瀬寅次郎、育英黌(東京農業大学の前身)教頭を務める荒川重秀はこの札幌農学校 1 期生であり、Clark が唯一日本で指導した学生である。

戦前の日比谷高校の英語教育に関する研究－英語教師に焦点を当てて

保坂 芳男（拓殖大学）

明治 11(1878)年 9 月 26 日, 東京府第一中学が設置された。それ以降, 東京府は勿論, 全国を代表する中学校へと発展していった。明治後半から昭和にかけて多くの優秀な人材が全国から集まり, 入試の倍率は 5 倍以上は当たり前で, 大正 7 年には 9.8 倍に達した。その高倍率の入試を合格した生徒は優秀で, 勝浦鞆雄校長の時代(1890—1909)に発展し最初の黄金時代を迎えた。明治 33 年の第一高等学校への合格者は独逸協会に次いで 2 位(30 人)であったが, 明治 40 年にはそれを抜いて 1 位(35 人)までに躍進した(『日比谷高校百年史』上巻, p. 97)。次の川田正澂の時代(1909—1934)には, さらに受験校としての地位を確立した。

新制高校になって 1949 年～1967 年, 約 20 年間, 東大の合格者が全国一位であった(小林, p. 33)「学校群制度」の導入によりその場を兵庫県の灘高や東京都の開成高校などの私学にその席を譲ることになったが, 戦前, 戦後の一時期までは日本を代表する中等学校であったことは疑いもない事実である。

今回は, その日本を代表する中学校に勤務した日本人英語教師・外国人英語教師に焦点を当てて, 当時の中学校で行われていた英語教育の実態を明かにしたい。今の段階で紹介することになっている英語教師は以下のとおりである。

日本人英語教師: 鈴木重陽, 岡倉由三郎, 衣斐鉸太郎, 中西保人, 細江逸記, 江並文三,
岡田明達, (森 一郎)

外国人英語教師: M. G. Emerson, F. E. Boynton, Mabel Guppy, George H.
Grant

発表概要 午後の部

聖公会伝道師・水科五郎関係史料と明治期のキリスト教伝道

田辺 陽子（東海大学[非常勤]）

水科五郎(1847—1892)は、日本聖公会における最初の邦人伝道師である。仙台藩士の子に生まれた水科は、明治維新後に静岡学問所、慶応義塾大学などで英学を学び、1872年にハリストス正教会のニコライから受洗した。その後、伝道に赴いた九州で困難に直面するなか、英国聖公会宣教協会(CMS)宣教師のバーンサイドと出会う。英学と神学への関心が高かった水科は、長崎の居留地で英語を学びながら、バーンサイドの後任・宣教師モーンドレルの右腕としてCMSのキリスト教伝道を補佐する道を選んだ。

ところが1878年、広沢参議暗殺事件の関係者として水科が投獄されるという事件が起こる。釈放された水科は、以後10年以上にわたりキリスト教の伝道活動から身を引いた。しかし、知己を得ていたCMS宣教師アンデレスに請われ、1891年に彼の日本語教師として函館へ渡ることになる。翌年から釧路を拠点に伝道師として活動を開始したが、不幸にも巡回伝道の帰途で猛吹雪に遭い、殉職した。

このように、水科の伝道師としての活動期間は、比較的短いものであったといえる。しかし、日本聖公会釧路聖パウロ教会の境内にある「水科五郎伝道師記念碑」が伝えているように、キリスト教が解禁された頃の聖公会の九州伝道、そして黎明期の釧路伝道に貢献した功労者だ。そこで本報告では、日本聖公会管区事務所が所蔵している水科五郎関係史料を取り上げ、彼が残したメモや書簡を紹介する。特に仙台の家族への手紙、CMS宣教師や邦人信徒らと交わした英文書簡は興味深く、明治初期のキリスト教伝道の姿や聖公会関係者の交流を読み解く上でも有益なヒントを与えてくれるだろう。

重見周吉と宇和島ほか新発見

菅 紀子（松山大学・岡山理科大学[非常勤]）

愛媛県今治出身の重見周吉は、創立間もない同志社英学校を経てイエール大学へ自費留学をし、医学博士号を取得して帰国した。その後慈恵会医学校で3年、学習院で10年教鞭を取る一方重見医院を開業し生涯医師として人生を全うした。学習院の採用に際し重見は夏目金之助と教授の座を争うこととなり、不採用となった夏目金之助は後に小説家夏目漱石となった。そして晩年夏目が『私の個人主義』の中で学習院就職活動の「敵」と称した人物が重見であることが判明した。以来筆者は重見が著書『日本少年』を残したこと以外何一つ知り得なかった段階から調査研究を続けるうち様々な発見を重ねることができその人物像を明らかにしてきた。しかし慈恵会医学校教授職の獲得経緯、また慈恵会と学習院の教員を辞職し重見医院の医業に専念するようになってからの重見については資料に乏しく、足跡が掴めないままであった。

本発表では、医師としての重見周吉の側面に迫る新発見について紹介する。まずイエール大学を修了したばかりの若き重見が帰国直後、慈恵会医学校への就職を可能にした事情を考察する。これは2022年2月19日第552回英学史学会例会において異なるテーマで「パークスの砲艦外交と宇和島藩の伊達宗城」と題しオンライン発表を行なったことにより誘発されたもので、重見の慈恵会医学校との接点は重見の出身地今治とは別だが同じ愛媛の宇和島にあるのではないかというものである。また、重見医院開業時代の医師重見についても知り得た事柄を紹介する。

朝河貫一(1873—1948)と G. B. サンソム(1883—1865)の関係

増井 由紀美 (敬愛大学)

2021 年の全国大会に於いて朝河貫一の国際的学術団体における活動について報告する機会を得た。準備の過程で、日本アジア協会に関しては楠家重敏先生の『ジャパノロジーことはじめ』(晃洋書房, 2017)から多くを学ばせていただいた。楠家先生は、イギリス人外交官の日本研究が優れていた理由として、赴任するや日本語の訓練を徹底的に行い、その後に文化、演劇、芸術、文学と各自が関心を持つ分野の研究に入ったと、調査より導き出し、こうしてイギリス派日本研究者と呼ばれる専門家が育っていったことを明らかにしている。本書は 1883 年までしか扱っていないが、この伝統がさらに続いたことは歴史が証明する。

今回取り上げる G. B. サンソムも、その伝統の中で訓練されたジャパノロジストであった。1904 年に通訳生として着任し、1931 年に出版した *A History of Japan* (日本文化史) は国際的な評価を受けた。朝河貫一はこれをイエール大学の授業で用いていた。また、日本アジア協会の『紀要』(*Transactions of the Asiatic Society of Japan*) に掲載された他の論文も学生たちに読ませていたと思われる。これは朝河がサンソムに送った手紙の控えから明らかになる。往復書簡は複数確認されているので、これを主な資料として二人の関係について考察する。

25 年ほど前に、朝河の授業の内容や教材、そして方法について、イエール大学の履修要覧(19007—1942 年)と日記を資料に整理し、拙論「朝河貫一の講義」(朝河貫一研究会編『甦る朝河貫一』国際文献印刷社, 1998)をまとめたが、その時には見逃していた点である。朝河貫一研究と日本英学史的研究を繋ぐ題材がまた出てきたことを嬉しく思う。

楠家重敏著『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』から学ぶ
楠家重敏前会長の研究業績一覧の作成を終えて

西口 忠（桃山学院史料室 特別研究員）

楠家重敏前会長の研究業績一覧を作成し、『英学史研究』第 56 号に掲載予定である。「発行に当たって」の文章にも記したが、楠家前会長の研究テーマは日英文化交流史で、特にアーネスト・サトウ、W.G.アストン、B.H.チェンバレンが残した歴史資料から、イギリス人が日本をどのように見ていたのかを調査研究されていた。

最初の本格的な著書が『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』である。この作品は日本英学史学会第 2 回豊田賞を受賞している。改めてこの作品のもつ価値を確認していきたいと思う。研究者にとってはバイブル的な大著である。「ネズミはまだ生きている」とは何を意味するのか？

報告者はこの著書の「序章 チェンバレンをめぐる人々」、「第 2 章 御雇外国人として」を特に点検した。楠家重敏の研究調査の実際を知ることと、この著書を他の研究者がどう参考にしたのかを確認したいと思う。多くの論文等に引用されているが、今回確認したのは 14 点で、日本英学史学会会員によるものは以下の 5 点である。

(1)川村ハツエ「B. H. Chamberlain と能(謡曲)」『英学史研究』第 22 号 1989

(2)川村ハツエ「Chamberlain と和歌」『英学史研究』第 23 号 1990

(3)竹中龍範「Directions for the Pronunciation of English, compiled by the Department of Education (1887) をめぐって」『日本英語教育史研究』20 巻 2005

(4)牧野陽子「梅界の風景 ～ハーンとチェンバレン それぞれの浦島伝説～(2)」『成城大学経済研究』(192) 2011

(5)平田諭治『岡倉由三郎と近代日本—英語と向き合う知の軌跡—』風間書房 2023

特に報告者が関心を持ったのは、一般の外国人が来日して、外国人居留地・雑居地以外に居住を認められたという、具体的な事例である。